

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 植田 暁

本論文は、中央アジア・フェルガナ地方の、ロシア帝国による併合（1876年）からソ連期の農業集団化開始（1929年）までを対象とし、ソ連邦解体によって新たに可能となった諸文書館所蔵の統計資料・文献史料を、歴史地理情報システムに統合して分析することによって、「農牧経済」という概念を提示し、多様な生業集団の複合体としての地域構造を解明しようとしたものである。

全体は、序章と結論および本論 5 章からなる。第 1 章が帝政期のフェルガナ地方盆地部における住民と生業、第 2 章が同山麓部における住民と生業、第 3 章が第一次世界大戦以降の動乱とその影響、第 4 章が動乱期の人口と住民のエスニシティー、第 5 章がソヴィエト政権によるフェルガナ地方の経済的再編である。

それらによって、遊牧民の農耕化および定住民との経済的相互関係の空間モデル、ロシア人入植者への現地社会の対応の差異、ソヴィエト政権による民族の再編過程、綿花モノカルチャーの推移、革命前後の社会構造の変動が、大量の史料によって解明されると共に、空間的な分析によって、異なる生態環境の中での結びつきこそが農牧経済を成り立たせていたことが明らかにされている。

従来の研究では、史料的な制約から、ロシア革命前後の比較は困難であり、当該地域については、もっぱら綿花モノカルチャーとしての側面だけが取り上げられる傾向があった。本論文は、同地域を、草原遊牧地域からオアシス農耕地域への人口移動が歴史的に繰り返されてきた中央アジアの類型的な地域として位置づけ、盆地部の定住農耕地域と山麓部の遊牧冬営地域が複合的・重層的に社会経済構造を形成していたことを農牧経済という語によって特徴付けている。

審査の過程では、歴史地理情報システムを活用した分析が緻密であり、フェルガナ州の多様な集団の生業や地域構造が明らかにされた点、同地方の自然環境に依拠した社会経済の実態に深く迫っている点、および帝政期の遊牧民による天水農耕拡大の過程や、1920年代綿作復興期の食糧不足の分析が極めて説得的である点に高い評価がなされた。その一方で、移住や農耕化の歴史的背景や、集落単位での史料分析をさらに深めることでエスニシティー政策の帰結がより深く解明できるのではないかと、政策を扱う際の担当者についての分析も必要ではないかと、分析が1929年で終わっているために、その後の展開への見通しが弱い、などのコメントが出された。しかし、そうした問題点が本論文の積極的意義を否定するものではないことを確認し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。